

平安の世の歴史散策

【行程】

小坂公民館⇒⇒⇒⇒ 多太神社⇒⇒⇒⇒串茶屋民族資料館⇒⇒⇒⇒実盛首洗池⇒⇒⇒⇒
篠原古戦場⇒⇒⇒⇒⇒(昼食) ⇒⇒⇒⇒⇒仏御前の里⇒⇒⇒⇒⇒小坂公民館

武士の意気地か老木の花か。篠原に散った斉藤別当実盛

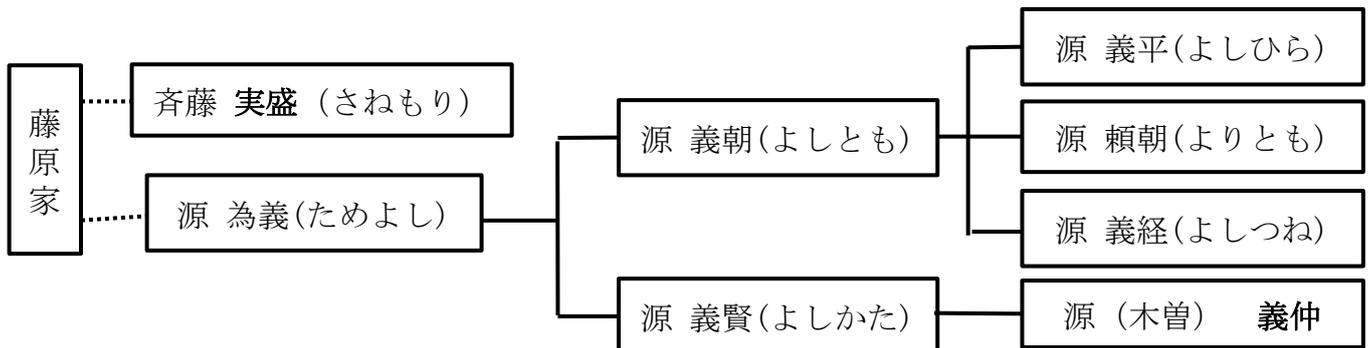
【木曾義仲 1154～1184】

- (1) 源義仲。武蔵国(今の埼玉県)で生まれ、源義経の義兄弟にあたる。
- (2) 二歳の時、父・源義賢(よしかた)が大蔵館事件で源頼朝(よりとも)の兄義平(よしひら)に殺され、義仲は逃げる途中、斉藤別当実盛に助けられ、木曾山中の中原兼平に預けられて育てられた。そして、名を木曾義仲とした。
- (3) 1180年挙兵。1181年、越後平氏を横田河原で破り、北陸での武士勢力を拡大した。
- (4) 1183年、倶利伽羅合戦で奇襲作戦「火牛の計」により平家の大軍を撃ち破る。「篠原の戦い」で再び平家と戦い平家軍総崩れとなる。
- (5) 入京後、後白河法皇と対立、法皇は源頼朝に義仲追討の命を出す。
- (6) 1184年、源頼朝が派遣した義経らの軍に敗れ、近江の栗津で討ち死にする。(31歳)



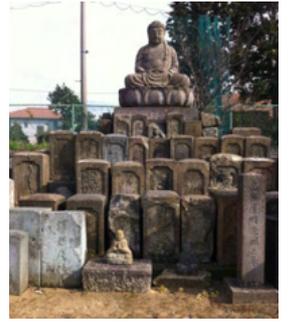
【斉藤別当実盛 (1111～1183)】

- (1) 実盛は、藤原方を祖とする武士で、越前出身だったが、武蔵国(埼玉県)に所領を得て移住し、源義朝、源義賢(義仲の父)とも知り合いだった。
- (2) 源義朝と義賢が対立し、義賢が殺される。実盛は、表面上は義朝に味方したが、生き残った義賢の息子(のちの義仲)を密かに保護し、木曾山中に逃がした。
- (3) その後、源氏が平治の乱で滅びると、一転して平家に仕えた。これは当時よくあることで、当主は一族や領土をこうして守ってきた。
- (4) 義仲は命を助けられた恩を忘れず実盛を助けたいと思っていたが、実盛は自らの老齢を踏まえてこれ以上主君を変えることをよしとせず、源平合戦を最後の花道と決めた。
- (5) 篠原の地で、京に上る義仲に攻められ、平維盛等が撤退するなか、実盛一人退去せず赤地の錦の直垂(ひたたれ)に、萌黄緋(もえぎおどし)の鎧を着て、兜の緒を締めた一騎の武将、手塚太郎光盛が「なのらせ給へ」と言葉をかけるが、決して名を明かさなかった。
- (6) 討ち取った光盛は、不思議な武将と思い義仲に首を差し出す。池で首を洗うと白髪が現れ実盛と知れた。義仲は幼い頃に実盛に命を救われており、恩人を手に掛けたことを悟って人目もはばからず涙したという。
- (7) 源義朝に拝領した兜を付け、現主君・平維盛に許された出で立ちで故郷に錦を飾った実盛も、かつて命を助けた義仲の情にすぎることなく討ち死にした。
- (8) 「篠原の戦い」から500年後、多太神社を訪れた松尾芭蕉は実盛を偲び「むざんやな 甲の下の きりぎりす」の句を詠んだ。



北陸道随一の花街として栄えた串茶屋

- (1) 江戸時代の初め、加賀藩と大聖寺藩のちょうど境目にあった串村には一里塚が築かれ、その付近で2軒の茶屋が営業を始めた。そして、北国街道を行き来する旅人や、街道整備の人夫たちが足を休める茶屋ができたのが「串茶屋」の始まりだ。
- (2) その後、加賀3代藩主前田利常が小松に隠居し、那谷寺の再興にとりかかると、そこで働く職人たちが串茶屋に立ち寄るようになったので、遊女を置いたといわれている。
- (3) 串茶屋は1660年に大聖寺藩領に移されたので、以降は大聖寺藩公認の廓として営業が続けられ、大聖寺藩のお殿様も通っていたようだ。
- (4) 最も栄えたのは文化・文政の頃(1804~30)で、20軒ほどの茶屋が軒を連ねていた。その頃の串茶屋は、文人墨客が遊ぶ文化サロンといった趣を呈し、遊女たちは、三味線や琴、胡弓、笛、舞踊などの芸事をはじめ、俳句や和歌、生け花、茶の湯なども習い、その教養と気品は京都の島原に引けを取らなかったといわれている。
- (5) 明治になって公娼制度が廃止され、また国道筋での営業禁止などもあって、明治33年に、串茶屋の廓は約300年にわたる歴史の幕を閉じた。
- (6) 資料館の建物は1829年の建造で、かつて能登屋という酒造家の客殿だった。天井画「雲龍」は加賀藩お抱え絵師・佐々木泉景の作品である。
- (7) 一般的に遊女の墓は一括供養されている場合が多いが、串茶屋では個々に手厚く葬られている。



美しき白拍子・仏御前の伝説

- (1) 仏御前は永暦元年(1160年)に原町で生まれた。小さな頃から深く仏法を信じていたので、いつしか「仏」と呼ばれるようになっていた。
- (2) 絶世の美少女で歌と舞にも優れ、14才の時に京に上り、時の権力者・平清盛に白拍子としての技をみてもらおうと会いに出かけた。都で評判だったとはいえ、一介の白拍子、最初は会おうとしなかったが、当時、屋敷にいた同じ白拍子、祇王のとりなしで会うことになった。
- (3) 「君をはじめて見る折は・・・」、美しい声で今様を歌い舞う仏御前。その非凡な才能は清盛の心を揺り動かし、彼の寵愛を一身に受けることになった。しかし、悲しんだ祇王は妹や母とともに出家し、嵯峨野の従生院(現在の祇王寺)へ入る。
- (4) 祇王は、館を去る時、障子に「もえ出るも 枯るゝも同じ 野辺の草 いずれか秋にあはではつべき」という歌を書き付けた。
この歌は、「春に草木が芽を吹くように、仏御前が清盛に愛され栄えようとするのも、私が捨てられるのも、しよせんは同じ野辺の草、白拍子なのだ。どれも秋になって果てるように、誰が清盛にあきられないで終わることがあろうか。」
この一首の歌に、仏御前は無常を感じ、やがて祇王を追い、出家の道を選んだ。
- (5) 清盛のもとで栄華の日々を送るかに思えた仏御前も、それまで清盛の寵愛を受けていた祇王を思い、17才の秋に長く美しい黒髪を切り落とし、祇王母娘を追って仏の道へと入り、ともに従生院で仏道に精進した。
- (6) 数ヵ月後、仏御前は身ごもっていることに気がつき、安元2年(1176年)晩春のある日、祇王に別れを告げ、故郷である原に帰る途中、白山麓木滑(きなめり)の里で男子を出産。子は亡くなり、仏御前は治承4年(1180年)、21歳の若さで短い余生を感謝のうちに終えたと伝えられている。
- (7) ふるさとへ帰る時に祇王母娘のため、みずからの姿を写した像を形見として残してきたという。その像は仏御前が亡くなって後、祇王寺より原村に贈られ、現在まで美しい姿で伝えられている。

